

陳舜臣さんを語る会通信

NO.78 Aug. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2022年8月10日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

長編推理小説9作目『まだ終らない』、10作目『白い泥』

本号では、長編推理9作目『まだ終らない』（書き下ろし 1964 角川書店）と10作目『白い泥』（書き下ろし 1964 学習研究社）を取り上げました。（編集委員 橘雄三）

『まだ終らない』

人物紹介ほか

主たる登場人物は次のとおりだが、はっきり主人公といえる人物はいない。

●賀承邦（がしょうほう）

三十歳ぐらいに見えるが四十歳近い。日本留学の経験があり、日本語が話せる。優雅で哀愁を帯びた長身白哲の美丈夫。父は戦前、外交官だったが、汪精衛政権に協力したこともあり戦後は獄中の人となった。母はずでに亡く、父が釈放された後、賀父子は香港で商売をはじめた。しかし、武家の商法でうまくいかず苦闘中に父は病死した。賀承邦は五年前、スラバヤの大財閥、源益隆に入社。インドネシア政府が民族主義的華僑排斥政策をとったことに関連し、源益隆は、資本逃避、具体的には日本企業との提携の可能性を探るべく、賀承邦を日本に派遣した。賀は自己裁量で、億の金を動かせる立場にあった。来日、「康安薬房」に止宿

●共田宏（ひろし） 五十五歳、へしゃげた顔をした陰気な男。もとの名を黄宏（こうこう）という中国人。二十年以上も前に帰化して共田



宏に。南京町で三十年近く漢薬商、「康安薬房」を営む。妻は日本人・はる。源益隆の当主劉英宗は従兄

●共田晴恵 二十二歳。二年前に短大を出て、灘のミツバ化学工業の経理部に勤める。賀承邦に惹かれる。彼の出現が晴恵に血の半分を呼び覚ますことに

●溝口昇 四十七歳。ミツバ化学工業経理部長。バー「ぶらつく・きやつと」のママ・根津常子とは深い関係

●吉野初子 二十二歳。ミツバ化学工業経理部勤務。共田晴恵の学校時代のからの親友

●吉満徳治郎 ミツバ化学工業経理部勤務。三十過ぎ。会社の金を度々着服。その金は、バー「ゆり」のホステス芳子との遊興に消える

●根津常子 元町通りのバー「ぶらつく・きやつと」のママ

●胸毛の男 根津常子の新しい男？

●竹森警部 兵庫県警の警部

作中時間■同著は書き下ろしなので、発刊の年、一九六四年か、その少し前が作中時間か。作中、ハンター邸の王子動物園への移築の記述がある。移築の年は一九六三年なので、それも合致。



角川小説新書版表紙

『まだ終らない』補足

「ハンターズ・ギャップ」

ハンターズ・ギャップを少し入ったところで起きた事件がストーリーに大きく絡みます。

ハンターズ・ギャップというのは、再度山への登山道の一つで、戦前、神戸在住の「青い目の外人たち」（徳間文庫版p.53）が利用した道です。登り口がハンター邸脇にあったので、そう呼ばれてきました。

「一般の人たちは、たいてい武徳殿の横から登るので、ここは外人専用路の観を呈していた」（p.53）。でも、戦後は見捨てられた道となりました。

陳舜臣さんご自身、再度山登山は、ルートは違っても、欠かさず、毎日登った時期もあり、特に、華僑の人たちには、戦前戦後を通じて日課となっていました。

そんなところを重要な舞台に設定したのです。

竹森警部の依頼で、ハンターズ・ギャップに入り、遺体を捜す共田晴恵が、谷の脇道で、その下に賀承邦の死体を連想させるボンハズの花を見つけるシーンは印象的です。（p.141-143）



徳間文庫版『まだ終らない』関口苑生氏の「解説」より抜粋転載

(小見出し、及び傍線は編集委員)

最初から壮大なるエンターテイメントを志していた陳舜臣

本書『まだ終らない』は、陳舜臣の第九長篇となる作品である。

昭和三十六年、『枯草の根』で第七回江戸川乱歩賞を受賞し、鮮烈なるデビューをはたしてから三年後、作家としての地歩もようやく確立してきた頃だ。ちなみに、この間に彼が書いた著作の題名だけでもあげておくと、『三色の家』『弓の部屋』『方壺園』(短篇集)、『割れる』『怒りの菩薩』『天の上の天』『月を乗せた海』『黒いヒマラヤ』『まだ終らない』『白い泥』(デビュー三年にして長篇が十冊、短篇集一冊と当時としてはかなりいいペースではあるまいか。つまりそれだけ読者からの要望があり、出版社からも注目されていたとかがえていいだろう。また、作者のほうもそれによく応えて矢継ぎ早に―しかも質の高いものを次々と生み出していた。

当時の資料(『寶石』昭和三十八年九月号掲載の「ある作家の周囲」陳舜臣篇)を見ると、小説を書いた動機が「誇大妄想気味で、司馬遷になろうとした」とある。ところが、さすがに「史記」を書くのは無理なので、「西遊記」や「水滸伝」を書こうと思ったという。この両者も立派にその世界を創造している。おのれの世界を作るの

は、男子一生の事業たりうと思ったというのである。してみると、陳舜臣は最初から壮大なるエンターテイメントを志していたようだ。

ミステリの世界、そしてその先、中国近代史第一弾『阿片戦争』

事実、彼はその後も着実にその世界を、そして自分自身を鍛え上げる道を歩み始めている。というのは、驚くべきことにこの当時から彼はライフワークである、中国近代史の第一弾『阿片戦争』の資料をこつこつと集めて出しているのである。ミステリの世界から出発しながらも、彼の目はこの頃からもっと広い視野で「文学」というものを眺めていたのだ。

時代の要請、時代に選ばれた作家陳舜臣

またこの時期―昭和三十年代半ばから後半は、空前の推理小説ブームであった。火付け役となったのは、当然のことながら松本清張であろう。彼の登場で、それまでの「探偵」小説がガラリと一変したのである。単なる謎解きだけでなく、事件の背景や動機など、人間と現実社会を盛り込んだいわゆる社会派、さらにはハードボイルド、スパイ小説などミステリの枠が急激に拡散していったのだ。

また、三十三年に多岐川恭が直木賞

を受賞して、三十四年の戸板康二、三十五年の黒岩重吾、三十六年の水上勉と推理小説畑の作家が次々と受賞した。そんな時期に陳舜臣がデビューしたのだ。

いってみれば、時代の要請であったのかも知れない。多大なる可能性を秘めたエンターテイメントである推理小説がブームとなり、その機運に乗りながらも、次なるステップ、飛躍を目指す作家の登場を、時代は待ち焦がれていたのだ。そう考えると、彼は時代に選ばれた作家なのかも知れない。

(陳舜臣氏は)デビューからしばらくは密室トリックやアリバイ崩しにこだわっているかのよう見えだが、それも実は機械的なトリックではなく、いくつかの組み合わせあるいは生物学的暖かみのあるトリックなのである。

本書においても、トリックらしいトリックは一切登場しない。がしかし、その埋め合わせを人間の行動の不可思議さ、おもしろさといったものを書くことで、よりミステリらしい作品に仕上げている。

一九八八年九月



徳間文庫版表紙

『まだ終らない』題名を考える(頁は徳間文庫版)

題名に近い表現のある箇所を三箇所拾い出しました。名前は伏せました。傍線は編集委員の加筆。

いま、晴恵のかかわりあっている犯罪は、△△△△△の自殺で終りを告げたわけではない。彼女はカンではなく、事実によって、それを知っていた。(p. 161)

一匹の男として、カズくで、ほしいものをかちとろうと苦勞したのだ。どうやら、そうした辛苦も、これで終わりを告げたようである。

(ずいぶん苦勞したものだ…)彼はしみじみと、そう思った。そして低い声で、自分にむかって納得させるように、「さて、やっど、これで終わった…」と言った。(p. 171)

〇〇は、ことが終わったとは、けっしてかんがえなかつた。彼女の裸体を見下ろしている□□□が、まだいるではないか。(この男は、もうすべて終わった、と思っっているのだろう)(p. 207-08)

『白い泥』 登場人物ほか

主な登場人物 &

主たる登場人物は次のとおりですが、はつきりと主人公といえる人物はいない。強いていえば、前作『まだ終わらない』と比べ、竹森警部の存在感が際立ちます。

- 浦賀辰造 長野県K町の「浦賀寒天」の主人、七十歳近い。知識欲旺盛。「寒天の鬼」の異名をとる。神戸のジャクソン商会を通して輸出
- ジャクソン商会 ロンドンに本店がある英人商社。主力は繊維と雑貨。東京と神戸に支店を置く。神戸支店では寒天も扱う
- ヘンリー・ジャクソン ジャクソン商会神戸支店支配人。ジャクソン本家の次男、二十代。前任のトーマス・ホワイトに代って着任。服務規律にうるさく、特に金銭的不正を見逃さない
- 三倉弥一(みつくらやいち) ジャクソン商会副支配人格。勤続三十年。いつもにこにこしているので「満月」とか「仏の弥布」とあだ名されている。山本通のアパートで、不治の病の妻と二人暮らし。一人娘を小学生のときに亡くしたこともあり、深尾昭子をわが子のように可愛がっている
- 長井宗一 ジャクソン商会神戸支店、入社十カ月。三十二歳。長身で、「ノッポ」、「電信柱」、「テレビ塔」などとあだ名されている。「テレビ塔」はゴシップ好みにも通じるが、詮索好きで、「観察の鬼」でもある。竹森警部に情報提供することも度々
- 湯浅秀明 ジャクソン商会神戸支店営業担当、四十三歳。阪南商事の常岡新一と癒着。目に余るリベート取りで、新支配人のヘンリー・ジャクソン旋風に怯える。妻と二男二女の六人家族

- 深尾昭子 ジャクソン商会タイプピスト、二十二歳。高卒三年目。飴色の細い緑の眼鏡がよく似合う清纯派タイプ。常岡の誘い、攻撃に陥落。誇り高い乙女が愛のしもべに。早くに両親を亡くし、孤児生活を経験。芯まで清純では生きて来れなかった

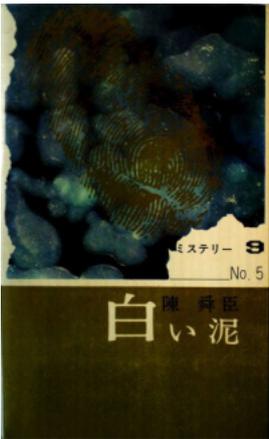
- 常岡新一 阪南商事で雑貨担当、二十九歳。小さくてすばしこく「ねずみ」とあだ名されている。仕事にかけては敏腕だが、女に手が早い。「ジャクソン商会の担当社員の弱点を握っているから、あそこの注文はぜったいイタダキ」と豪語。弱点を握られているジャクソン商会の社員とは湯浅秀明のよう

- シンガポール「裕利公司」 ジャクソン商会神戸支店から着いた麻袋の荷に死体か

- ジェームス・リー シンガポール「裕利公司」の若い主人

- 康老人 シンガポール「裕利公司」の番頭。謹厳・誠実な人物

- 竹森警部 兵庫県警本部捜査一課の警部。陳さんは竹森警部を「多くの事件を解決し、なかには伝説的な物語にされているものもあった。新入りの部下などは、とかく彼を神格化して見る傾向があった」と記述、前作より格上げしている。はつきり主人公と言える人物がいらない本作品にあって、大きな役割を演じる



ガッケン・ブックス版表紙

ジャクソン商会の建物(イメージ)

陳舜臣さんは、ジャクソン商会を、文中、次のように描写しています。画像は、今に残る15番館ですが、雰囲気は感じられるのでは。



ジャクソン商会は、元居留地の一等地に小さいながらも二階建てという、いまにすればぜいたくな建物である。以前、近辺にはおなじような商館の建物が多かったが、いまではほとんど高層ビルの街と化し、むかしの面影をとどめているのは、ジャクソン商会だけとなった。頑固な面魂で、谷間にふんぞりかえっていると聞いた恰好である。(徳間文庫版p.92)

ネタの使い回し

「立花丸」でシンガポールの「裕利公司」に着いた荷から死体が見つかる。この場面である。

昭和初年、上海から神戸港にはいった日本船「上海丸」の船艙に、持主不明のトランクがあり、なかから女の死体があらわれたことがある。被害者は半裸体のうえに縄で縛ってあった。「トランクから半裸の美女の死体あらわる」と、当時の新聞紙を賑わせたものだ。(p.58)

このネタは、のち、『神戸異人館事件帖』「消えて消されて」で使われる。

『白い泥』新保博久氏「解説」及び ネットで拾った感想

新保博久氏「解説」、抜粋転載
小見出し、傍線は編集委員

昨今、陳舜臣氏は推理作家というイメージが希薄
初期のミステリは冷遇され気味

二、三年前、大衆文学から現在のいわゆるエンタテインメント小説のリバイバル企画を進めていたある編集者が、どんな作品が復刊を望まれているか、会う人ごとに希望を聞いてみたそう

うだ。そのとき、本格推理系の若い作家から、「陳舜臣さんの初期のミステリーを読みみたい」と言われて、ちよつと驚いたという。もっと昔の入手困難な作品を挙げられるかと思っていた

せいで、当の編集者氏にとっては、陳舜臣作品などはついこのあいだ刊行されたばかりという印象だったからだ。
だが、考えてみれば、陳氏の推理小説がせつせと文庫化されていたのは一九八〇年代まで、いま三十歳前後の人たちは、あまり手に取るチャンスがなかったかも知れない。文庫売場の陳舜臣コーナーは、より人気の高

い氏の中国歴史小説やエッセイで占められ、許容量の限界から

推理作品のほうは間引かれる結果となった。八〇年代以降、氏の新作としては現代ミステリが激減し、推理作家というイメージが希薄になっていったせいもあるだろう（この一九九年五月から集英社より「陳舜臣中国ライブラリー」全三十巻が刊行されるが、八六年からの講談社版陳舜臣全集全二十七巻でもミステリは冷遇され気味であった）。

五十冊に及ぶ陳ミステリのうち、手に入りやすいのは十冊にも満たない

『枯草の根』と『炎に絵を』とが、たびたび装を変えて繰返しが、再刊されている按配で、それ以外に新刊ですぐ買えそうなのは日本推理作家協会賞受賞作全集（双葉文庫）の『玉嶺よふたたび』（六九年）と『孔雀の道』（同）、集英社から再文庫化された『北京悠々館』（七一年）、中公文庫の『崑崙の河』（七一年）と陶展文もの短篇を含む『神獣の爪』（九二年）、そして近作である『夢ぎめの坂』（九一年）が講談社文庫に収められているぐらいであろうか。

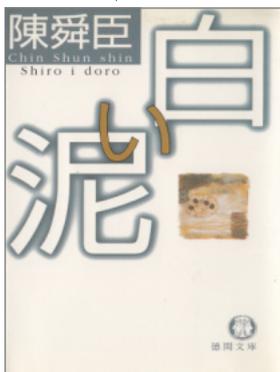
五十冊に及ぶ陳ミステリのうち、十冊にも満たないのである。だから、本書『白い泥』の文

庫化は久々に渴を癒すものと言っている。ほぼ全部が一度は文庫化されているのに、不思議にこの一冊は取り残されてきたもので、ファンにとってもまさに幻の作品にほかならない。

『まだ終らない』『白い泥』は楽しく書いた作品

『まだ終らない』初刊本の角川小説新書版カバー袖の「著者のことは」によれば、「生来のむら気で、小説を書くことが、そのときどきによって、苦痛と感じられたり、たのしく思えたりする。どうやら、これには周期があるらしい。この作品はたまたま、小説を書くのがたのしくてたまらない、という時期に書かれた」というが、その三ヶ月後に刊行された『白い泥』も同様の気分で執筆されたに違いない。

一九九九年四月



徳間文庫版表紙

ネットで拾った感想

無断転載、ご容赦。私（橘）はネットに出ている感想、レビューを読むのが好きです。誰に気兼ねもないので、思うままにおっしゃっている。好意的なのあり、辛辣なのあり。

下記の評、三毛太郎さんの、「読者まで寒天に閉じ込められたような気分」とか、「何故か癖になる感じ」というのは、なんとも「言い得て妙！」

Eiichi Hara

寒天作りに精を出す頑固オヤジが登場し、やけに詳しく寒天の取り引き事情が説明されるので「はて、これは推理小説じゃなかったかしらん」と訝っていたらちゃんと殺人が起きてひと安心（笑）。登場人

物に魅力がないのが玉に瑕だけど、最後にタイトルの意味がキチンと明かされるオチもついて、なかなか面白かったです。



三毛太郎

ひたすら地味かつ陰鬱にじわじわと話が進むので、被害者と一緒に読者まで寒天に閉じ込められたような気分さえ醸し出す。奇手も意外性もそうあるわけじゃないんだけど何故か癖になる感じ。

naka9999

近くの図書館で唯一開架にあった陳舜臣さんの本。解説にもあったが、陳舜臣さんに推理作家というイメージはなかった。最近の推理小説と傾向が違うのだろうか。私としては歴史小説と同じような調子でおもしろかった。